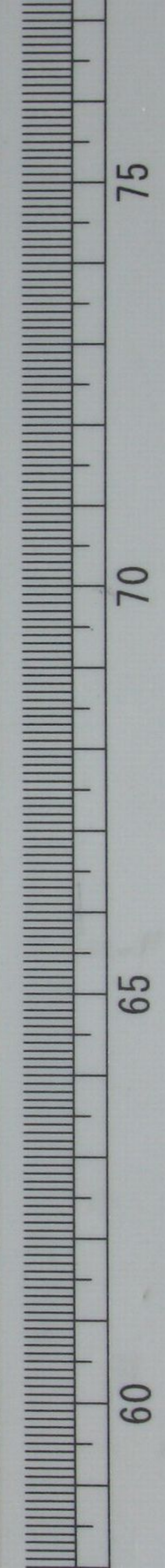


中村俊定文庫  
文庫 18  
538





々

新撰猿菟玖波集

山崎の宗禮大菟玖波乃一集或編一七  
 龍造れかきもあはれあはれ花洛の貞徳  
 其等とはしめて文質をまらるるあはれ  
 新増大はくハ集と題し風流のつとまらむ  
 古ま天文と祭寛永の比も延寛まむて  
 尚流乃始祖雖波れ梅翁はくけ花や  
 なると辨小遊の竹香都鄙小亮満すされハ  
 爰小談林風起るまをれ尚享元禄及て

外分巻



西雀芭蕉活徳あと大不越と愛す此時を  
詞の親句をよみて安永乃今を時と辨れ  
流行ハあれと発句附句やまたに誦句のそと  
なる所謂正風非是也尚時東武乃流語を  
點取の附句を好む古まを天文と天和の比  
とにくらぶる格調韻語を事又かゝる風を  
宗禮とけめ其時の人々今世の風俗なる  
はるみもあつたせのため一二を奉く

女まありやあはれ侍りし  
海よりまきこころさけぬ中世と 宗禮

やとあまあめとて抄修きく  
むととをうな乃強張よむ勢 守武

あつたを多くあつまる  
印比又後ハ喧嘩とあつた 貞徳

香のくさりもゆきあるはう記  
侍人ハまきとせぬ慰ハ故ハ又と 季吟

火井の石れ床小起り  
登下淋きまきまれひとと下女 梅翁

おさあいと恋乃下及秋も又  
夜交まきり八月出てあつ



此多くしの句むりい初は進はる由急巻中  
少も稀くくみて人果残る事となすも  
貞享元禄乃此ハ今亦同く趣此作意  
多し

又小今あると成る後川  
小宮と二夜不見る縮妻 西雀

人多き時久しき記わこし  
下女の泣出す浪此塗 釜

星はくつんは二十八日  
むくるきハ殊小軍此大車之 芭蕉

序二

細き筋をわ哀は乃る  
物にも方不地くとせらるるまで

裁つ衣の筋ふさるる計志はし  
揚屋の軒笑ふ膏乃同 沾徳

牛馬の糞きさなりし流きぬる  
ちいさい村と世を似城 来山

うさてやな様と見れい嘆き危  
月の紙ハものたしぬ 才磨

夕ささるも沖揚はる玉禱  
行燈をよめて 浪人 嵐雪



たどおて母の多けりも家田  
志をうれておる益人乃教 其角

あてこといハ小僧いやる

年乃豆蜜柑の核も落ちりて

け外いり初とも者へ未熟れ人ハ只恐と乃  
丸んと一句の仕立ふんをやる左のりし附合の  
有増なるもつんえ侍るも句乃次女ハいつま  
成とも連歌四道ハ附方と中とてお越んは  
一卷の挿巻を去實ふまの侍るハ何そ  
いりしハ初らる中れあえんやさる先師批評の

巻々とも褒賞乃志郎ある附句と集の已の  
拙き評の句とも混して全部十巻と係し  
初学附合ふも流けるたよるも笈羽根ハ  
二出れ志るもとくまむ半其水とと釋すハ  
似しと大英玖波を流くハ幸と幸ハある  
先哲乃標題ふあらハ毛ハ助れ足さる等ともそ  
猿流くハも号すくまぬの浅まりとゆめ答め  
きまの穴賢

荏土神田玉池 一陽井素外著

安永七年戊戌冬十一月





猿蓑玖波集

卷第一



春詠諧連歌

江連飾り家と燕後の富柳不  
男子とおもふ元日乃春

栗堂

時そ自然の陽氣活達  
肩衣をとるる草書れ多き

吳龍

世話とうしろに記る母親  
万歳のまて考え詠る録  
計公曳



さもない半も春て若代て  
才苑うと山と器女ハ笑以きえ  
紀高

去年の形ても正月の能  
茵とりのは宝引とむき齒く  
素藤

坊末ハ夜もをふむつゆ  
宝引の人数とるる湯ハ客  
寛之

夕暮乃ゆやうと又小つの子  
母の尻中へやうあるたふみ子  
素角

二代目ハ禪室もあつて高賣  
芳とやうな苑如門玄  
津宜

上一

松ほのくともきくむ番祢宜  
左義長小焙アこはるれ膝  
百童

猫をたふして二夜包む厨斗  
菽入をゆきも母乃いそく也  
素竹

駕籠かきのたふして上る才嫁  
自悟年くく返い菽入  
青芝

あつてふた雨も中ゆる露の前  
衣おろしよき春の寐心  
素芳

文雅の友れ只二人片生  
春色の柳ふたやき角田川  
枝静



馬場と結ぶれ宮遠の垣  
梅咲て藝塚よ見る雪あかり

梅郊

大膽そのく國ハみちのく  
速やうに花散も梅とさへりり

苔雨

隅田今戸晋子の津と花をら  
皮千寸中小襟多の梅香

素明

連をええくる敷の浦のりと  
梅屋敷たつとを食口をさむ

操舟

今川そのの氣をと透りて春色  
きりも一朝咲く細りうめ

龍昇

上二

梅もくの木もゆひまきの垣  
うらひそく声拾おふ京をし

素玉

春の口れをや腕する櫻陰  
泥田かへして癖さうなる

栗堂

平井へもまき人の出ぬ月  
まをさくしゆしく水の小田比芥

輕舟

待つるきい初合乃て幾代物る  
苦いけハあし野老うる癖

扇里

女ウ中もよく見ゆる京  
麻の子中拾子静ふまの面

呉仙



静見上野花庭の土圭  
相番乃守口小あゝる春の面  
素角

梅のしらたをえ人の十四日  
大几中不礎あゝる雨後のつゆ  
吳龍

春平か事春の世の才  
空小几中居まの童ア地子踊り  
高岩 露水

子桶の接並く坊ふう好  
雛祭傳所及一伯母の指写して  
素琴

先生を呼ぶ答の花  
麦飯を傳授のト女乃出かりて  
蒼雨

旅人なとをきけり泥の空  
花のまをたてと静を京乃町  
吳朝

寺と武家との平此約也  
不てはうれぬ酒屋も花の人  
技静

奥の清入をきけり戸此春  
芥菫ハ七重小曲けてハを撰  
貞知

傘持の身もまけり埃のま  
琴ハ遠き子接まこりて  
吳仙

味噌と摺うら小ア人田螺乳  
けららさくと挟い別荘  
著存



昔重徳の軒むらき寺  
二日改るふふつつく糸さくら 素芳

都がけやちりゆわい憎れと  
下馬の梅の大やうちる 貫太

泣れちるに居る才と恨むま  
梨木の花梅の中にもさめり 素登

蛇の鳴る蝶もさうく換日乳  
糸のよん花とさる海棠 花菱

素通りをさる告めらるたいにお  
山吹毛評判の彩 茶屋 輕舟

庭をさ出来て下されし庭  
梅草花をさるねいさんとて一巴

自由のなるいなりやか場不  
隅控て下る佃の蜆 其葉

日の伸ことも波の思ひぬ  
這出る這出ぬ蚕二むしる 栗堂

庭をさる毒と知るる春毎ハ  
床をさる毒と知るる春毎ハ

日ハ脱的ハ打ぬ子の昼下り  
春ハさけても殿の性急 寛厩



猿菟玖波集 卷第二

夏誹諧連歌

半のこころ結のつら並いやう

拾不見あり母義のほどつま

四方ハ若菜ハ水色の空

なうハもそ杜鰐きく吐月捨

大發きつてちんと拓 詰

塩能の藝乃うちすちととき守

貞知

吳朝

素芳

上五

南ふく日おらけうけし

皆碎ふ心響と笑る下女ひとり

去るよさすす日のをやき川菫

者新響ハ封乃ちぬるくて

拾ふそ出合うらの縄 兼

かいと一丁急 詠年とほく

くよもいよく 杖晴の禿

阿のさりと若菜ハ水色ハ山

朝夕の神ハ摺れる書 札

古風な巻く千のさるたちたれ

素羅

色波

下谷 素月

龍昇

花城



むくー帝都の残る惜く  
桐乃木ハ花と捧く嘆きく  
風舎

風なりぬ暑くくふて口み  
草臥ー牡丹も花の肥りけ  
亀洞

くさーきせるとあさく千坪  
柔うつけハばふ茶葉の下昇ハ茶の聲と  
素盈羽及

心とり醒しり陶子乃酒  
腐儒者堂とる火とさほー  
慮得

嫁衣娘衣著残衣笠  
花常桂志まふ田のふもより  
梅郊

ちや雨雲も夏 柳一陰  
八九間投ると早苗よいとち  
笠秋

今朝掃除まけハ下籠たてこ入  
や碎らるる蚊も穢れて  
素人

穢人多く人あさき 町  
き穢の乳母ハ危き 印地赤  
素琴

今とちのまー流徒の軍配  
恐ろしく加茂川の水ささき  
常路

晩ハ草やまも吞仲るとして  
藤刈毎泥糸さし  
如雷



才上のよしも怪いのむらこ  
春うらうらう焚火天の苑  
栗堂、

志やんと四角小掃出—と  
空天の湯屋小老人只ひとり  
吐鳳

苑の地さる苑川を縁さき  
日の盛アくる雨よ添乳—して  
素琴

少ら—ももいみ戸橋外  
日けうりよ家も替女の投擲田  
雀舟

立てみるちりにある夏の粧  
いうめ—く扇とはふ古戦よ  
扇里、

焚きる護广の畑も夏の  
百日紅—ささる  
李克

赤出—のよい芝居もよ—悪—  
大夕事ららえて居れハチ  
吐鳳

千金の夏とかく—四糸川  
き急なく降六月の雨  
校静、

振也か—ア 群ハさめ柔味  
夏に糸衣の夏と茶屋習此茶屋  
龍昇

庭ホする涼と張りし婦と伯母  
告めのうまい夏の萩歩行  
素盈、



一むきりくの入りあ際  
世を捨ぬ家と感よる、夏の暮  
貞知

うぬいと暮るる 大坂の声  
供舟の乃ん家ハガ―暮てうら  
色波

舟ハのるをり足るり粟―  
新川岸の客つも一抱きく之暮  
賀重

五條通りも口糸への人  
夕涼と子ハほのくと天瓜粉  
佐國

日のぬせきるハるぬ生垣  
金魚屋ハ泉水よりも浅い家  
一巴

上八

物の増をも又るる 孝行  
まろけぬハ心もとなき高葉瓜  
笠亦

ままめても辛記干所乃喧  
きいめて辛記干所乃喧

念佛とやも不膝行は所之  
明の蓮け世ハ生き出―心  
寛藤、

戯れのうら家のつくも医作也  
三階乃眼ハをき凌音  
南部 皓

うんこるまゝ 絶―巻 天  
版時ハをすれく 北田 州 元 佐國、



猿菟玖波集 卷第三

秋詠諧連歌

二三軒に五軒 離き宿まつき  
今朝初秋の茶を同み付

梅邦

暑さも秋の月此夕景  
一ふらひ短尺竹の志さんと成り

吳朝

村雨の晴て暑さの秋もさ  
枯れ山ハひくくく乃声

枚靜

上九

いつ海らき一月の朝つゆ  
をせ紙葉を菴の葉戸小立換え

梅邦

そく遊風の砂と荒て秋  
髪のもり薄いとえ甲の女帝花

李克

月かき秋の初風優員也  
昼も卧菘や公家似の萩

涼山

初秋や日脚の遊き朝系系  
川急ハ風の穂をふくむ縮

寛彦

猪首小地の朝霧志門うりと  
猪首小さくの鶴尾の出来

吳龍



奇藤さふぬさると八中けととり縁  
紫毎ふん申る紫の分抱。 素苜

老をんえれとまめな禅門  
つけてやる牡丹小先の地と紫し 栗堂

元をゑる妻れ白歯たしき  
積り起ると豹肥の實とふ 雅邨

地信の隅子地まひしき  
系瓜こもなうぬ蔓中をこうて 慮得

秋さく人ろ 味き胆乃  
刈てらさうたにやうはく粟 畠 吞鳥

上十

事のしとあて起る別荘  
日のさくはくそ夜明けのかり瓜 一巴

冷しや片嶽精進の朝はあ  
比き五条も夕顔の汁 丸室

まろ住つうぬ石山虫おく  
ちんちりとさうたにまよ推うもと 花菱

漱まろやみおを萍まろ月  
故のちろをえれもりし 秋の虫 百童

尻とぬ伽の女侍原 居  
鳥の裾して披す衣形の虫の声 真田 梳水



夜をむやふ思つて寸純灯  
厂の声机子ふなえしふり一巴

客乃出うけを先つ具福吉  
昼見れハ麻七起し以起てまし梅部

山位とおもひのゆ子田刈時  
麻中ふすて後ろし何飯婆百

痛すのくせふ散し起起うけて  
月はくやしりるる流壺曳尾

今春ハ懈とほく屋ととも也  
南さおしき月子子家の戸をさして下谷  
秦月

上士

芦の穂乃只ほいやうと風も家し  
月夜けりふ湯船こく川ト人

いつとて七氣の美い花をも  
関流と棧敷の幅ふ呼上て吳朝

せハ一ない思ふ祢ささくは六  
角力とり智恵のないけ毒あかし輕舟

月見もとささし田の足くぬ秋  
相撲流り花子系ふといひ出して笠歌

心外の方とむらさくる疵乗持  
もとかへてほる店の内流慕慕歌吐鳳



隠居和尚を羨いその好  
新茗香はらふ茶室を合点して 公曳

徒然の末より庵裡にてある  
秋乃昏人相をみる人れ来て 曳尾

明残る月の斜に野分立  
人雲をあす北濱の秋 枝静

養子も塔折るる乃老病  
房乃之縁世をなく菊見きて 花雪

茶花も縁も一金杯の寧  
皆上戸菊ハ淋しき花てなし 梅寿

上立

刀の柄小外縁次乃 謎  
實めいな中間を撰る菊うらと 岩榎 雀郎

夕昏の秋とよまされて初霧の月  
もみち乃雲此立か移る足 素琴

入日の業お中反圃乃  
小坊この程くかつき一枝まらち 如雷

あうりより朝日の西る月乃秋  
一番船も海上の富 花益

夜吐しけりつら屋うらの答  
えやり函も少淋しその九月尾 令嘉



猿菟玖波集 卷第四

冬 詠 諧 連 歌

宮をせぬ日の閑も葉も  
棒櫂の常時多記初一もれ

兵 父

本陣茶の茶巻も出るまの  
大引の吹くる福不巻をほ免

雅 邦

はくたぬのたりに流る旭乳  
氷ふまてあるを鴨膏

花 雪

上 三

まめてちんれはなぬ茶もせ  
初巻うかりこと咄すは市

笠 母

ゆくぬ氣て足れハ廓の冬結て  
落茶の神細けもある

龍 昇

一宗の本山元と冬うま  
落葉も尺ハ流る雪函

慮 得

うらうなやうても流むハ春空  
木草ハ老て茶の花さうり

如 雷

心子をほるせうひる茶如  
多仙りりさく時子はく

眉 山



花戸へとけりて尺巻とぬきと  
きく菊の咲日あそりのむらじ  
其友

鴨の羽さ小白泥朝霜  
芦枯て材木露のた  
花菱

出むくは嶮胆ふくる畑の茶屋  
招明振てあそき切ぬけ  
梅部

吹とらひせ麻布十番  
玉あられ蹄の踏千手一合  
蛇田

後徒はくき酒の引出す  
初雪の降るよりと笑寐入  
羽公佐

上十四

十能の柄折れと證きふ振むけハ  
一番の碁乃うち小大重  
涼山

きお子泣くぬを粉一ふく  
今入れる縁を這子れ重まらめ  
、

もとれハ屏る下女も調りも  
重の客火の焚やうと自悟一工  
梅寿

少一ハ曲る白髪の森  
雪系小傳授の手綱ありらふて  
其葉

よりけりともたにまけぬ難波は  
冬花紅んせの花時夜と  
慮得



あつとく玉をふむ風 街  
鯨とそいたむ漁村の大元 扇里

雪時兩日私も冬はあけて  
出刃研く襟へ袖 鯨のまはら 其礼

連中お集るとも川をまわす  
町から狸おんかしの後 其礼

何もかそよふと常と又直し  
二男ハ居出る 河 飯 汁 悪水

氣ハ勝てぬる妻のた志  
徒もたて申て暮え 川 帆 立 貝 雀舟

ちと待く時を換ひよ多羽の暮  
車とつせたるはしれ牛 蛇 田

切強子輝け陸子も喜をさき  
餅をささよと佐いを振蕪 寛 羅

酒の元乗て北 風を押し  
年の市賣人買人もかけ流し 素 奥

餅ひらろ嫁の節屋を大誇き  
をあるまふ妻の流之る 扇 里

床やうくととこちうけても  
大世日障か内へいさよふ 素 大



猿菟玖波集 卷第五

神祖譚諧連歌

燈もささくく栄る朝起  
元日の留さ乃栄てわら伊勢はるき  
亀文

素通る小名伝て行伊勢同若  
杜谷

亡八花露小太くを  
如雷

かじりけりさハ冬冬乃秋  
迁宮を孕て清原も速直  
九室

餐服の小 襷を拂ふ清田扇  
芦皓

田極女のおよ一社家町んを  
素登

眼まわし一神明家の春々一き  
允升

紅ハ砂地内外清洋  
素芳



うろの風やをよく若人  
さーぬきの業も清後の水漬黄  
栗堂

月もふゆはの山添の  
神の灯ふまゝさきさる藤の声  
梅郊

夏蟲小ものき記人声  
初の内糸の跡の日のちさ  
貞知

片舟てえれハ行付とより客  
音まの湯夜盤切子狸  
公曳

子の竹ぬうち子刺刃へ西日影  
糸つえ子束て基をおて居  
曳尾

相口の医者も長居れ大原居  
誇きえらりて日待とろける  
雀郎

風家とたられ彦おハ替女  
食り日待の素言茶三石  
丸室

朝子性来子提燈乃殺  
年の夜と顔見えの来れ太神糸  
吳龍

男えらりと知ぬ出指子  
笛ふまの月拭いちとち神糸  
其虹

今一絲ちり秘ちらとと虫  
社伝知の菌もきを急して  
素玉



案内ハ先へ連ハキル  
著存

茸狩のふと凄くちる古ヤ  
素人

都むかひて縁起賣ッ社地  
呉朝

山乃安川の流連も年を移て  
操毎

木立小くき橋姫のま  
李克

木々美奈裕の猿と兼て  
上六

結搦ハ名子宮く日先  
其葉

天地の仁ハかきこ  
花城

娘ひふりく津く  
素山

且那又て禰伴を捜す丸禰  
角麻

神酒上てく井戸子涌高  
依國

一むくももまハ清ら  
依國

地糸の場へ隣り  
依國

やくさいもな  
依國

表比は積こま  
依國

師まき子入て  
依國

神通者神とま  
依國

孫子さく日の  
依國

竈くくひ声も  
依國



猿蓑玖波集 卷第六

秋放詠諧連歌

浴衣の帯のまゝのまゝの内  
一ふ幅はたのせふは陀尼えそ  
栗堂

乃とやうに被る岸の旭は  
千薺佛の搦ふ鼻筋  
素苜

原走めくさり大酒の翌  
重佛片眼とろりとよい天氣  
岩槻  
素云

上十九

立場を五條ふ忍の末一本  
秋の日もきり念仏のせうぬき  
花城

は晴とぬき若菜の大世界  
天上天下秋迦の約合  
素角

十夜月取の村のうらうら  
うとくしてものをかされぬる地  
花雪

おろそえちり母の先達  
菜のちみ咲くくされ六地花  
如雷

跨くまのいとと脱ちり  
練供あふ流れて花菩薩汗を拭  
風舎



彼岸前うらうらも定まる  
天まも楳も人もちうほくと  
佐國

久しうりもて出さる信徳  
著存

冬忍院春の日記も静なり  
医老ハ陰する。日暮秋凡  
東福寺ちうぬもちの上と行  
亀文

そや草枯の穂子血の乃  
女人半と夏ハさるるをうけらり  
梅壽

索麩の茹たる間を徒果し  
寮の暑さと本堂で知る  
久松 玉圃

上社

高柴ももよの分うれぬ胡  
大伽藍不つ建されいさめとあし  
栗堂

栲乃旭子平あまる  
奥の徒凡うなうても肌をまき  
考  
亀文

大寺の采雲うも石ふきかして  
山門きくさるる  
岩 庵  
三女

竹町りうは晴を  
多を極深な孩子の塔乃先  
流  
孰舟

泉ふふ舟阿る寺ハあもる  
雅邨



早稲の寺小中宮の寺も入て雨  
来道

提灯の火で焚火分る電の下  
寺中の誇き門書て産  
色波

秋を色み乃る夏のゆらかり  
は寺いさく八人舞も田を也  
過橋

宮をとりりひ八月思への  
お寺を吐しやきれぬ親子中  
麻布  
素月

きれやふおてかえり酒後始  
舞々の片ういさへいひ並  
不逸

初ううふ古山の付し奇麗好  
若る麦湯の煮える寺北初雪  
松あ

物半のお江戸ハもつまじくを  
原をのちに解の初巻  
栗堂

昔うう村もふて見れハ世の楽和  
漁村の中不法の志く  
梅郊

神泉苑の水のあけはの  
守敏より空海の如き古め記て  
常路

度の定りの早い六月  
中徳一も山を満が表海をのそ祿返り  
笠家



定くし客ハ卯月の末牡丹  
時宜きるさむふりよる紫雲  
梅郊

出さくる人も襦。雲中

十念のちめハ和尚のちろ業

千年ふ及ふ樹の下石の上

流を清んて口せく僧

背ぞへよよる生玉の坂  
其友

老僧の提ても見えき菊紅葉

ろろよく入日見積るまき巻  
曳尾

立流るる新僧のまき巻  
上竺

年号も人子書せし封し令

大工小残る僧の遺 云  
声波

岸小立せして粧む使 弘

ぬさくとして似合しき僧の眉  
亀文

心ろろ々のたける十月

納不坊掃り如くか自剃して

まゝ風をいらくむろを看給時

本周坊の細い之 藤  
合浦

先づ治まるる北朝の法代

勅字の間ふ腕押も山法障  
貫太



今も昔も思ひの如く  
万年如尼の命の續く

杜谷

口と暮し一り舟の轂回  
小比丘尼の名を呼んで

公曳

終験若の才持と云はる  
孤付

、

梵禱二人又いひ住居の  
梵禱

奥中村  
素明

地理子要一き梵禱の  
芝水

上世三

古風な虚を流る回國  
かゝる風も出る

盈斜

百日行の程以足とり  
老人といひ

其虹

聖法花鉢院の利祿もた  
振旦の夜も二夜三夜

素云

他宗ハ他人池上の町  
白く申く

蒼雨

禱持とせよと門と  
素符

素符



茶碗月子出川板の間北秋  
檀方らるると笑ふ人いかに  
虎角

目もまじ御の杖千連之山  
春なれや西影小舟も東山  
下谷 素月

昔うらきくそをき恋せり  
祭心とまて奢りきいめる  
来道

公事常はうし向余熱三階  
後出のやう小自賊福よむ人  
笠歌

五月うらう九月八余福きいやう  
俄分限の大般若好キ  
麻布 素月

起よとまいそ風一回ハ掃ちきり  
夜明小夏書物凄い後家  
梅郊

剥て控てもやまぬ大屋家  
掬舟の水乃流ける杖の先  
杜谷

大草師の雑司谷様  
極楽八居風呂桶小首つうけ  
牧之

遠いハせぬを三井の酒  
細舟の船路とらるるを  
寛藤

半百の茶巾着もをきこ人  
笑ハ猪牙小珠敷とらるる上  
栗堂



意悲若と成りし老の馬工郎  
 然膽ハ不きを急らしき珠教感 十教  
 安このおれもく見ゆ野袴  
 江戸中を初代めいさる和仲散 過橋  
 肘て除ヶ今ふ 雲の内 外  
 見えるならちと年号ぬ片持木 素后

神祇釈教雜

上六五

松風とみこくすお萩の音  
 冥夏正しく名款よみける 涼山  
 巳の巳ハミなくれたうき 藝 雀郎  
 此家来トヤとて此具負の所決  
 くつ川よりハ大黒さけし并る 露水  
 家内皆去用のへお忌留して  
 子の吞きこを 呪のあ 川遊  
 朝陰ハハツさおける 彦と 是  
 あまうと畏さふぬし 急買 芭我



猿蓑玖波集 卷第七上

戀 誹 諧 連 歌

素人踏き小敷ハ明の 滝  
をハぬ意切口状て別道ハり  
梅 郊

病ハと乃とがら最々ぬ系生道  
うをく上との清意も阿る意  
雅 郊

一笑以芳ふ玉ハ夜食出る  
恋の仕上ケも親親の世法  
上 共

清士ウ火の煙ハ雲乃上と下  
及たぬ意を尋ふとむい款  
吳 仙

志やう事なり一の縁側へ出る  
意居小笑し上戸も医のまゝめ  
涼 山

雨の酒をそあての下々お  
似合ぬ恋をゆつたれと  
松 水

多小麻さろ好とる髪結  
おんさいお意も足ゆた大 倦  
蛇 田

和しとやうても望みは家風  
片おもひ一信不踊とこの事  
亀 文



火神子飛子千尋啼き  
凡引の半し待敷のうらまて 亀文

皆意地の宗旨遠く猶原に  
後本ふし所 伴人の杖

きぬ後たてるし物のね掛き  
仲人う蹴るく捨るめきま 涼山

少との湯へやらいつと今比  
常ふかりの娘の 露堂

とどげりも貯ま上言の人  
きことおしめて娘をきくとおん 岩槻牧之

上巻

相談いふ来ぬみぬてきり此後  
娘ハ末也後かハ石なり 汐芝

きろくし若い素顔ハ化粧より  
見てらさうくのあち子後家 蛇田

隣一のかさしあま川柳陰  
姉ハ姉とけ常れ志こかー 伯幹

柳はららよ振うよめ神  
ちろ酔子尻瘻前の歌と見え 貞知

下うらひらて居るあ 漬  
瘦しうら影ハ親の家より



吐しきくくくくくくくくくくくく  
おふくろはよきよきくくくくくくくく  
合浦

きよくて陸る言早う日士  
一巴

俗縁の寺人結納の昆布分て  
呉々

汗の玉も玉の汗  
吐風

花城

上共

律義日士のをもてぬ縁  
芝水

来道

涼山

呉仙

素竹



口状て匹半ハ直小ゆくまゐる  
芳あて並に嫁の元 瘡

合浦

立居ても来りよの何に肥り内  
軒塔の秋と成し里附

来道

祈もまい半おもりろき十九廿  
雪ころろをーに染甲の重

素玉

帯の志まりもころい暑後  
奥振の法先へふりよいこも入

允升

かいれの寝ふ根燭ちろくくと  
墓目の矢元奥を執り守

苔雨

上六九

皆身縁よの影いととく  
七夕の夜と昔よまゐる染女中  
兄に小おる柔の繰えう目ふくま  
内心如夜又荒き仇喜

其礼

著存

津もあるやう小燭燈しし  
薄意小成し根悟柔の伽

契重

四つ色も秋の日さーハ朝のま  
はぐー揺への髪ろ麻ーさ

狐舟

砂の降こをね吐ー浅く  
片居の麻ぬふ花伽の夜々出

来道



仮初小仕切の屏風の片明り  
老女のほひる内目見の乳

錦芝

内納涼水もくろく不出きて只二間  
女の才小医の志の大小

百童

綴小多糸粉の春れ々々れ  
川やうし女中とつくさき 凡中

其虹

まさ急な階子のくる新二階  
女々提くもい行 粧

栗堂

伯父の屋敷へ寄るの口く  
三法も古のめは浮ぬ女 才 者

公曳

上三

戯色のふりて又て元一海

龍昇

和うか申小一角 京 とな  
江島山限りと又えさ一むま

玉團

つらさくも暮る妻と女房の透りて  
医志も和尚も翰の志を

公曳

女房と心一もくち記着はうり  
表も宵小志める 吹 降

外遊

捨子細め小灯もききく  
女房ハ厄もくらのよも撰きく

津宜



何處へてもかさね火磨針と改て  
女房うらやと細とほしく行

十散

方丈様のかろふ筋とまろせむ  
妻あひもと就服肉と積あくと

其葉

汲はともよいまさくくむ時  
妻さくくと證く梅 漬

素琴

落札と出ぬちめのを後客  
小多子泣けて咽ふまろ妻

苔雨

撲急か半と妻あめをやはら  
菜と造れ葱もくろ妻

百桂

上世

此別荘のうらげめいふまぬ酒  
美人の色乃るるい金屏

亀文

塔院のあも出ぬめく勒影不  
日本の美人乃相い小泣く

麻布  
素月

次のおろ一えて親なる花見塔  
容貌美人舞一そく子心

綿芝

舟い出ぬてもを纏うはる  
むまの髪まろくると女妻の眼

菖存

六道小舟と掬りくるまろづ  
出〜妻をとりとて入る

一巴



太く交交病家なるもの  
 妻はくまきとをのし 絞乃艶 虎角  
 日和まきし甲き葉大根の花 ト人  
 香のまきまほらけの妻はまき  
 兼綴りもなれはちうと年の言  
 妻のうはらふ申うとあがる家 風舎  
 空はくまきまきまきまきまき 扇里  
 扇もくまきまきまきまきまき 玉圍  
 火も強くくぬ銀のまきまき  
 おまきの歌ふ原をのまきまき

上世二

赤由流尔

赤由流尔



Handwritten scribbles and faint text at the bottom of the page.



